

第九週

庭の大銀杏について

廣い庭を隔て、眞向ひに、大銀杏が樹つてゐる。樹齡幾百年といふこの古木は、幼児を瞰下ろして、絶えず無言詩をなげかけてゐてくれる。春秋いつでもいいが、老木でありながら、再生の力つよさを見せる新緑のこの頃は、是非注意ぶかく見せておきたい。秋にもなれば、ほろ／＼と銀杏が拾ひきれない程落ちて来て、親しみも深くなる。枝や葉の端的な見方と共に、ほのかながら全容から受ける靈感も味はせたい。それには先生が一緒にこの氣持で、絶えずこの大木の變化に氣をつけてゐて、幼児に話しかけておくようにする。

第十週

ハンスの馬鹿

不思議な力を持つてゐるハンス馬鹿のはなし。グリムの中に度々出てくるこの主人公の名は、いつでも不思議な力を持つてゐる。變化があつて面白い。

第十一週

河馬の手紙

大きい河馬の寫眞を貼つておいて、この手紙を讀んで聞かせる。動物の中でも特に興味の對照であるから、この手紙で河馬の生活を知らせる。

皇太后様の御事

當幼稚園には嘗て行啓遊ばされてゐるので、年長組にもなれば式の前日に話しておく位では無く、二三日前に相當の時間をまつて、話してきかせる。幼稚園の各保育室を御巡覽になつた話。新聞の切抜きも、藏つてあるから見せたりする。

第十二週

魔法の泉

靴屋の出世

何れもイタリー童話。イタリー童話で内容の面白いのは、かなり筋が複雑なので、年少組には使はれなかつた。そろ／＼幼児も、簡単な面白さや、語音の弾力性なぎだけでは満足してゐない。説明の出来ない不思議な力なきに驚

観 察

第九週

金魚屋、金魚は年少組参照。

金魚藻

金魚を見乍ら、金魚鉢に入れてある植物について同時に観察させる。土に生えてゐる草まぢがふ處を注意する。

ぼうふら

金魚にやる爲に水溜りからすくつて來たぼうふらが又きても面白い観察の材料である。形、動き、それが變態の順

異の目を瞪る。靴屋の出世では、お化けが出て來る。けれども年長組になつたさいふほこりのもみに、お化けなんかさいふ氣で却つて面白がる。この靴屋が誠に大膽で、お化けが多勢出て來ても一向平氣で、お化けの方が、その威力に敗けてしまふさいふ筋は、話の性質そのものがよく出來てゐるので話してゐても愉快である。

序、時期によつてちがつてゐて面白い。

めだか

月曜日の朝一人の男兒が昨日郊外に行つて掬つて來たさびんに入れてもつて來ためだかをさつそく金魚鉢に入れてやる。小さくて口の尖つて上を向いた目の大きいおさけた魚は一ぺんに保育室の籠兒になる。同じお魚でも金魚さずる分違ふ事はよく判る。そこで比較観察させる。同じ所を言はせて見るのも面白いこゝである。目高でも緋目高白目